不便に親しむ

現代社会に生きる私たちは常に時間に追われ、慌ただしい日々が続いています。この多忙さはコンピュータが普及して、益々助長されたように映ります。コンピュータが無かった時代は、私たちに人間の能力を超えた仕事は出来ず、仕事の範囲は自分の能力の中に綺麗に収まっていたのです。ところがコンピュータの普及に伴い、あれもこれも出来るようになってしまい、作業量は格段に増えました。コンピュータは人間を楽にしてくれる筈だったのに、どうしたことでしょう。現在に至って、RPA（Robotic Process Automation）と呼ばれる事業が世界的に進行しているそうですね。人間に代わってロボットに作業を行わせるものだそうです。でもその分時間にゆとりの出来た人間が、鼻くそほじってのほほんとしていられる訳がなく、結局私たちは更なる多忙さに追い回されること必至と推察いたします。

時々コピー機が世に登場した時のことを思い出します。一枚のプリントをボタン一つで複写できる便利さに、驚くと共に感動しました。あちこちに散乱するメモ用紙などを１枚にまとめることも出来て、これで紙媒体の資料の数が減る、と本気で考えました。ところが、その機器のあまりにも突出した利便性の故に、使い方は当初考えられたものから流動し、いつしかあれもこれもコピーをして手元に置く習慣が身に付いたのです。制御を失った私たちは、結局文書をむしろべらぼうに増やす結果に帰結しました。コピー機が存在しなかった時代には、文書は時間をかけて丁寧に作成していたと記憶しています。それがボタン一つで複写という容易さによって、文書の作成は非常に手軽な行為となり、そのためか文書の価値も低下したように映ります。読み手が隅々まで目を通して文章を読む場面は少なくなり、読み落としの頻度が増えているようにも思えるのです。

科学は世のため、人のために進歩していると言います。しかしこのような事例を見てくると、本当ですかと問いたくなります。近代に入って以降、科学は思想を失い、次第に技術に接近したと言われます。最近のノーベル賞の功績を見ても、天才的な発想に基づいて世界の原理を発見するというよりは、既知の理論に基づいて、新たな技術を開発したというものが増えているように映ります。ここで注目すべきは、科学技術の発展が人間の欲望を肯定して成立しているという点です。実際科学技術の発展と人間の自制心とは、反比例の関係になっています。一つの技術が開発されると、その技術の不便さが目につき、更なる便利さを求めて人間は落ち着きを失うのです。スマホ、パソコン、家電製品、更に生命も含めた全ての領域は、その繰り返しで終わりは見えません。また無限大に広がる情報群に人々の欲望は止め処なく刺激され、歩きながらでも、電車に乗っていても、そして隣に己の幼子が手持無沙汰で座っていたとしても、人々はちっぽけな画面にくぎ付けとなり、情報の大きな波に揉まれ続けています。まともな姿とは思えないこの人間界の光景は、科学技術の問題点を浮き彫りにしてはいないでしょうか。社会の利便性など、聞こえの良い言葉だけで先走る時代のうねりの中で、人々は息も絶え絶えに喘いでいることに自身が気づいていないようです。

このような時代の中で、私たちは少しは不便さを楽しむゆとりを持っても良さそうです。例えばスマホ。以前から申し上げているとおり、私はこれまで所有したことがありません。実を言うと、パスモも使用したことがないのです。電車に乗るときは専ら切符です。連れの人には、「ちょっと待って！切符買うから」と大声で宣言しないと、置いてきぼりにされます。確かに不便ではありますが、考えてみれば人生はそもそも不便なるものでしょう。四苦八苦という言葉がありますね。ここで言う苦の定義は、「思い通りにならないこと」とされています。なるほど人生思い通りにならないことだらけです。人間関係、仕事、病気…、過去を振り返っても悩まされたものばかりですよね。そのことを四苦八苦は、人間に生まれたからこそ思い通りにならないんだよという人間讃歌として説明します。であるならば、「人間」を少しでも多く楽しんでみてはどうかと思えてきます。

これからAIの時代が到来すると言います。きっと想像しかねる便利さが提供されることでしょう。しかし科学技術全般がどれ程に表面的な便利さを提案しても、人間に本質的な上記の不便さを解消することは不可能だと思います。不便さは私たちの精神に忍耐力を養い、怒りを抑えてくれる働きもありそうですね。この便利な時代にあって、生活の一部にわずかでも不便さを持っていることは、科学技術では得難い財産のような気がしています。

（ISID 健康管理室だより　平成31年3月）